

小 学 校

平 成 8 年 度

教育研究員研究報告書

| |
|----------|
| 生 活 |
|----------|

東京都教育委員会

平成 8 年度

教育研究員（生活）名簿

| 氏 名 | 地 区 名 | 学 校 名 |
|--------|-------|---------|
| ○山中 順子 | 新 宿 | 淀橋第六小学校 |
| 好澤 佳代子 | 江 東 | 第三大島小学校 |
| ○坂木 啓一 | 大 田 | 赤松小学校 |
| 桜井 秀樹 | 杉 並 | 東田小学校 |
| 安藤 圭子 | 板 橋 | 高島第五小学校 |
| 矢口 純子 | 練 馬 | 開進第二小学校 |
| 増山 和子 | 足 立 | 江北小学校 |
| 小辻 美智恵 | 葛 飾 | 宝木塚小学校 |
| 田口 一雄 | 江 戸 川 | 南篠崎小学校 |
| ◎浜松 章洋 | 八 王 子 | 第三小学校 |
| 西田 裕司 | 府 中 | 府中第二小学校 |
| 中堀 千枝子 | 小 平 | 小平第三小学校 |
| 岡部 ひとみ | 日 野 | 滝合小学校 |
| 長島 朋子 | 武蔵村山 | 第四小学校 |

◎ 世話人 ○ 副世話人

（担当） 櫻 橋 賢 次 教育庁指導部初等教育指導課 指導主事

目 次

| | |
|----------------------------------|----|
| I 研究主題 | 2 |
| 「身近な環境とのかかわりを深め一人一人のよさを生かす支援の工夫」 | |
| 研究主題設定の理由 | 2 |
| II 研究主題についての基本的な考え方 | 4 |
| III 研究の全体像 | 5 |
| IV 研究の内容と方法 | 6 |
| 1. 児童のよさの見取り | 6 |
| 2. 「受け止める」支援と「働き掛ける」支援 | 6 |
| V 実践事例 | |
| 1. 「ほめる」支援の見直しと工夫 | 10 |
| 第2学年「子ども広場へようこそ」 | |
| 2. 「見守る」支援の見直しと工夫 | 14 |
| 第2学年「地下鉄に乗って光が丘公園へ行こう」 | |
| 3. 「共に活動する」支援の見直し | 17 |
| 第2学年「育て！みんなの仲間たち」 | |
| 4. 「話を聞く」支援の見直しと工夫 | 21 |
| 第1学年「アサガオさんありがとう」 | |
| VI 研究の成果と今後の課題 | 24 |

〈要 約〉 小学校教育研究員（生活）

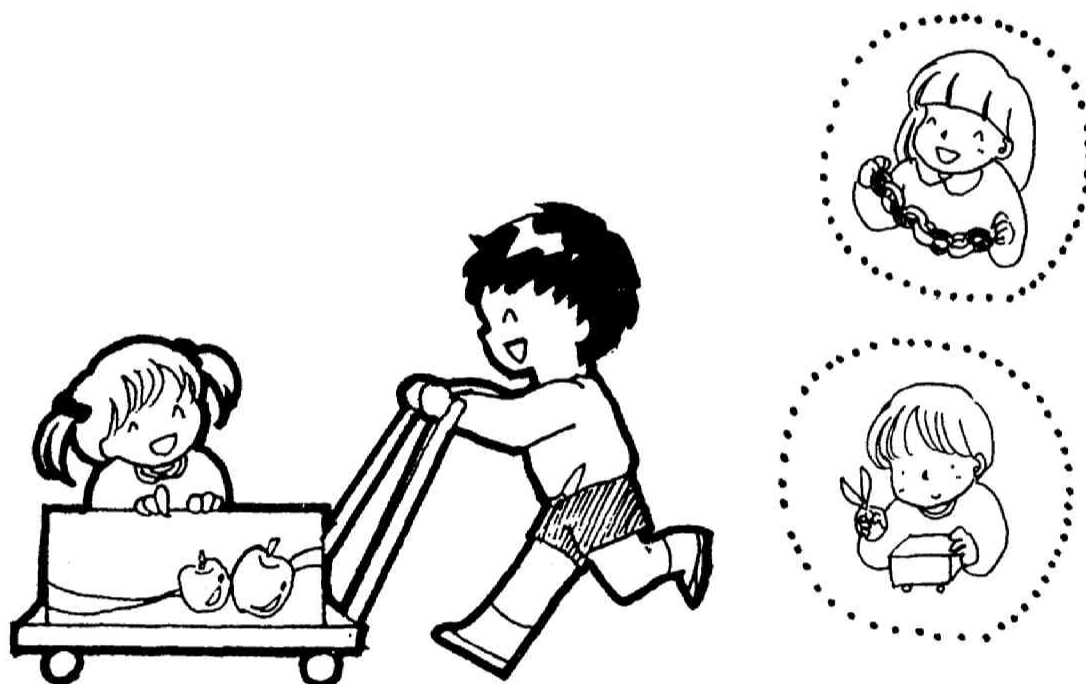
児童が身近な環境とかかわりよさを生かすという視点で、支援を「受け止める」と「働き掛ける」に分け、ほめる、見守る、共に活動する等の支援について、授業研究を通して見直しを図った。その結果、教師が児童の心情や活動の背景を読み取り、支援の時機や内容、方法を工夫したり、受け止めると働き掛ける支援を関連づけたりすることで、活動への安心感や自信を引き出し、児童がよさを発揮して活動することが分かった。

1 研究主題

身近な環境とのかかわりを深め一人一人のよさを生かす支援の工夫

研究主題設定の理由

おもちゃ大会で幼稚園の園児を招き、自分たちで考えた手作りのおもちゃを紹介し、一緒に遊んでいた時のことである。一人一人の児童が、自分らしさを発揮して、自分のグループのお店をきれいに飾りつけたり、おもちゃが不足しないように作り続けたり、園児に優しく声を掛けたりしていた。そこには児童の多様なよさが表れていた。



そのとき、A児は、自分の持ち場を離れて、空いた段ボール箱を台車に置き、園児を乗せて走り回っていた。普段から活発な反面、集中力に欠け自己中心的な言動の多いA児である。教師には、A児がグループでの役割を忘れて自分勝手なことをしているようにも見えた。ところが、「何をしているの」という教師の問い掛けに対して、A児はうれしそうに「順番を待っているお客さんがつままないからサービスしているんだよ」と答えた。自分たちのところにお客さんがたくさん来て順番待ちの列が長くなった。そこで待っている園児が退屈しないように車に乗せて遊んであげていたというのだ。この日、A児は、相手の気持ちを思いやり、園児に自分の作ったおもちゃを見せたり、遊び方を教えてあげたりしてかかわりを深め、生き生きと活動した。A児なりにお客さんを楽しませたい、おもちゃ大会を盛り上げ成功させたいという思いの表れだったのである。

児童の行動を、一方的にとらえたのではA児の思いを推し量ることはできない。児童の活動

を肯定的にとらえることによってそれぞれの思いや願いを生かすことができ、一人一人のよさが見えてくる。

このような事例は、生活科の授業でよく見られることである。私たちは、活動の結果だけではなく、児童が夢中になっている活動の姿そのもののの中に一人一人の児童のよさが表れているのではないと考えた。教師が、活動の結果だけに目を奪われるのではなく、児童の内面をも理解することが大事なことだと考えた。そして、このことについて話し合っていくうちに、児童のよさとは何か、それを引き出し伸ばしていくためにはどうしたらよいか、今一度真剣に検討してみる必要のあることを痛感した。

このことは同時に、一人一人の児童のよさを多様に受け止めたり、一つの行為でもその児童の心情を理解し様々な角度から多義的に見取り、よりの確な支援ができる教師でありたいという私たち研究員の願いでもあった。一人一人の児童のよさは、生き物の世話を毎日欠かさず続けるとか、どの友達にも親切にできる、など児童によって多様なよさがあるととらえることができる。また、一見、乱暴に見えたり、無意味に思われたりする活動でも、よく見ると、その児童なりの優しさや、ものの見方や考え方に基づくものであるとして、多義的に見取ることもできる。それらの見取りを適切な支援につなげて、より生き生きと自信をもって学習する児童を育てたいという教師の思いである。

生活科は具体的な活動や体験を通して、自分と身近な環境とのかかわりに関心をもち、自分自身や自分の生活について考え考えることができるようにするとともに、その過程において、生活上必要な習慣や技能を身に付け、自立への基礎を養うことをねらいとする教科である。このねらいを達成していくためには、一人一人の児童は有能な学び手であるという肯定的な児童観、学習観に立ち、児童の思いや願いを受容し、一人一人の児童が学習の対象となる身近な環境に自ら積極的にのかかわり、よさが発揮できるよう、学習環境を整えたり適切な支援を行ったりすることが大切である。

本研究では、具体的な活動や体験を通して身近な環境とのかかわりを深めるという生活科の基本的な考え方を踏まえ、一人一人の児童がよさを発揮し自己実現を図っていくための教師の支援の在り方について改めて問いなおし、その工夫や改善点を探る必要があると考えた。

私たち研究員は、上記の考えに基づき、標記の研究主題を設定した。



Ⅱ 研究主題についての基本的な考え方

私たちは、研究主題を次のようにとらえ、用語の整理を行った。

身近な環境とのかかわりを深める

生活科では、児童は身近な環境に具体的な活動を通して働き掛け、自分と環境とのかかわり方について体験を通して学んでいく。私たちは、身近な環境を、学校・家庭・地域などの児童の身近に見られる人・自然・社会ととらえた。

児童が、環境とのかかわりを深めるということは、環境に対する見方が変わったり、かかわり方がスムーズになったり、より親密になったりすることである。

例えば、「どうぶつとなかよし」の単元での活動で、ウサギを抱いてみたいのだが、なかなか抱くことができない児童がいた。その児童の環境とのかかわり、つまりウサギや飼育委員とのかかわりを追ってみると、こわさを我慢して何度も抱こうと挑戦したりえさの与え方を工夫したりしながら、飼育委員の抱き方を見よう見まねでやっているうちに、どういう接し方をすればウサギが喜ぶかを体験的に獲得していった。かかわりを深めることで最後にはウサギを抱くことができ、飼育委員と一緒にウサギの世話をするようになった。

一人一人のよさを生かす

一人一人のよさとは、自己実現を図っていく際の、その児童なりの思考や行動の独自な特長である。それは、顕在的なものだけでなく、潜在的なものや可能性をも含めたものである。

私たちは、身近な環境とのかかわりが深まっている姿そのものに、その児童のよさが表われていると考えた。児童がよさを生かして、意欲的に学習に取り組むことで、自分からできた喜びを味わう機会が多くなり、自信をもち、次の活動への意欲につながっていくと考えた。

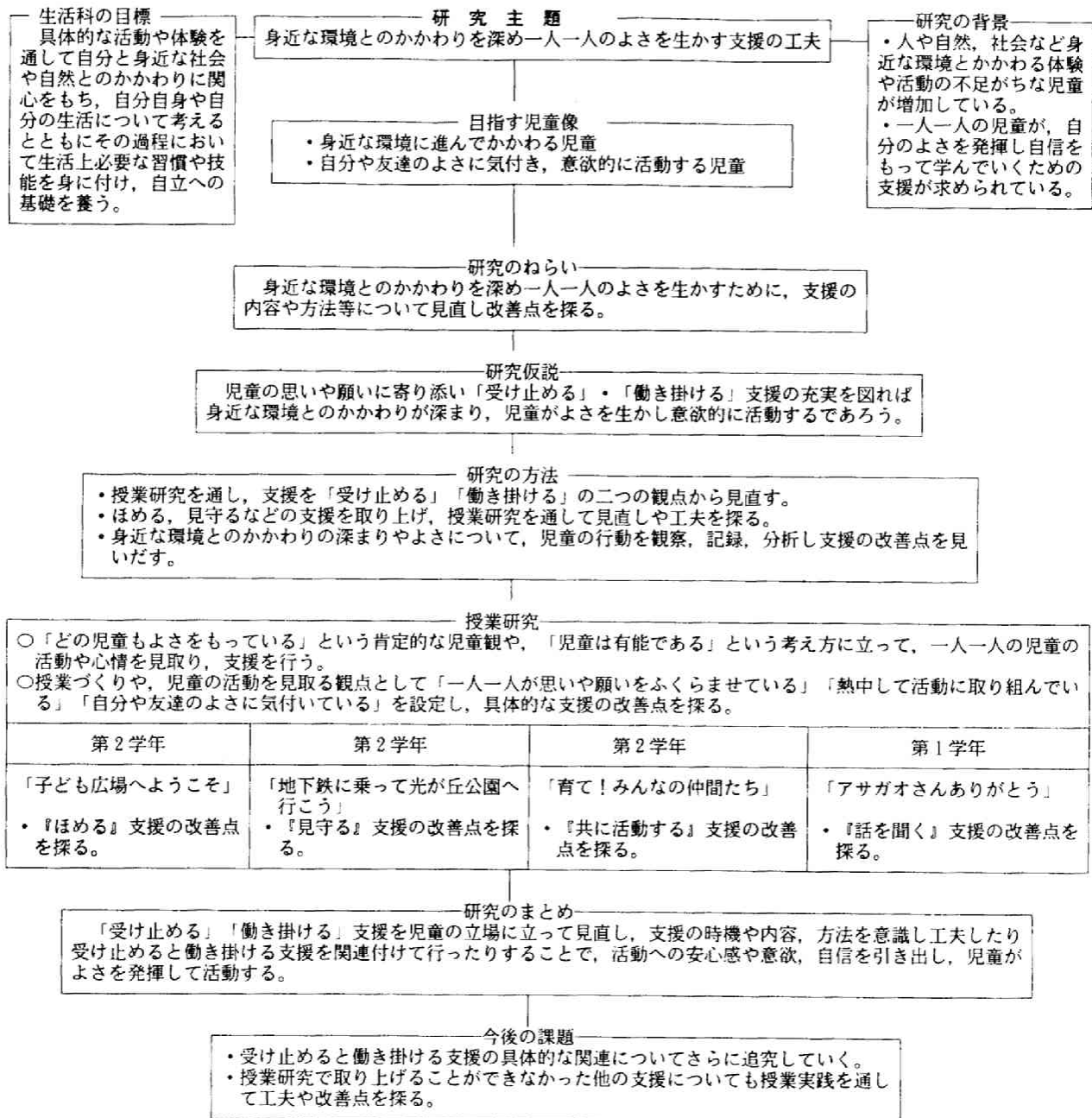
例えば、上記の児童について、ウサギや飼育委員の上級生などとのかかわりを深めている児童は、同時にこわさを我慢して何度も挑戦したり、上級生のすることをまねたりしていた。また、ウサギがどうやったら嫌がらないかを考えながら抱くなど、自分なりに試行錯誤や工夫をしていた。これらには、挑戦・模倣・試行錯誤・工夫などのよさが見られ、自分のよさを生かして活動している姿と見ることができる。

以上のように身近な環境とのかかわりを深めることは、児童のよさを生かすことになる。

支援の工夫

本研究では、身近な環境とのかかわりを深め一人一人のよさを生かすための教師の役割を支援と考えた。そして、支援を「受け止める」支援と、「働き掛ける」支援とに分けて研究を進めることとした。

Ⅲ 研究の全体像



IV 研究の内容と方法

研究を進めるに当たって、一人一人の児童のよさを生かす教師の心構えや支援の工夫について、次のようにとらえた。

1 児童のよさの見取り

(1) 児童のよさの見取り

身近な環境とのかかわりを深め一人一人のよさを生かしていくためには、どの児童もよさを持っているという「肯定的な児童観」や「児童は有能である」という考え方に立って、一人一人の児童の活動や心情をとらえることが大切である。

児童のよさを見取るためには、一人一人の児童の思いや願い、それに基づく活動の多様性に配慮することが大切である。例えば、公園での活動では、施設を使った遊びに夢中になる児童、虫や植物に関心をもってつかまえたり採集したりする児童など、児童一人一人の思いや願いは児童によって異なる。

また、一人の児童の活動を見取る場合でも、その児童の内面を様々な角度からとらえてみる大切である。例えば、一見、自己中心的と見られる言動でも、教師が周りの状況等を考え、視点を変えて見ることで、その児童なりの他者への思いやりの表れと見取ることができる場合がある。

したがって、一人一人の児童の活動を、教師の一方的な思い込みにならないよう、絶えず新鮮な眼で、共感的な見取りをするよう心掛ける必要がある。そのことが、より確かな支援につながると考える。

(2) 授業づくりや児童の活動を見取る観点

児童のよさの表れは、児童が身近な環境である人、自然、社会など学習対象とのかかわりを深め、「思いや願いをふくらませている」「熱中して活動に取り組んでいる」「自分や友達のよさに気付いている」姿としてとらえることができる。

例えば、友達と助け合いながらかかわりを深めておもちゃをすることで、前にも増して、友達と仲良く親切にできるようになるとか、毎日、観察や世話を続けかかわりを保つことで生き物への愛着が一層増し生き物について詳しくなるなど、児童は対象とのかかわりを通して、自分なりのよさを発揮し、そのよさに気付いていくと考える。

このように、児童と環境とのかかわりが深まっている姿は、児童の具体的なよさの表れとしてとらえることができる。したがって、児童と環境とのかかわりの深まりに着目し、児童の姿を「思いや願いをふくらませている」「熱中して活動に取り組んでいる」「自分や友達のよさに気付いている」の3つの観点を設定することで、単元全体や授業中の児童の活動を教師が意識して見取ることができるようになり、的確な支援につながると考える。この意味で、3つは授業づくりの際にも重要な観点と考えている。

2 「受け止める支援」と「働き掛ける支援」

(1) 「受け止める」支援と「働き掛ける」支援

支援を児童のために真に役に立つことと考えてみると、受容する、励ます、手伝う、情報を提供するなど支援には様々なものがある。これらは、大きく「受け止める」と「働き掛ける」に分けられると考えた。授業中の教師の主な行動は、言葉や動作を通じた児童とのやり

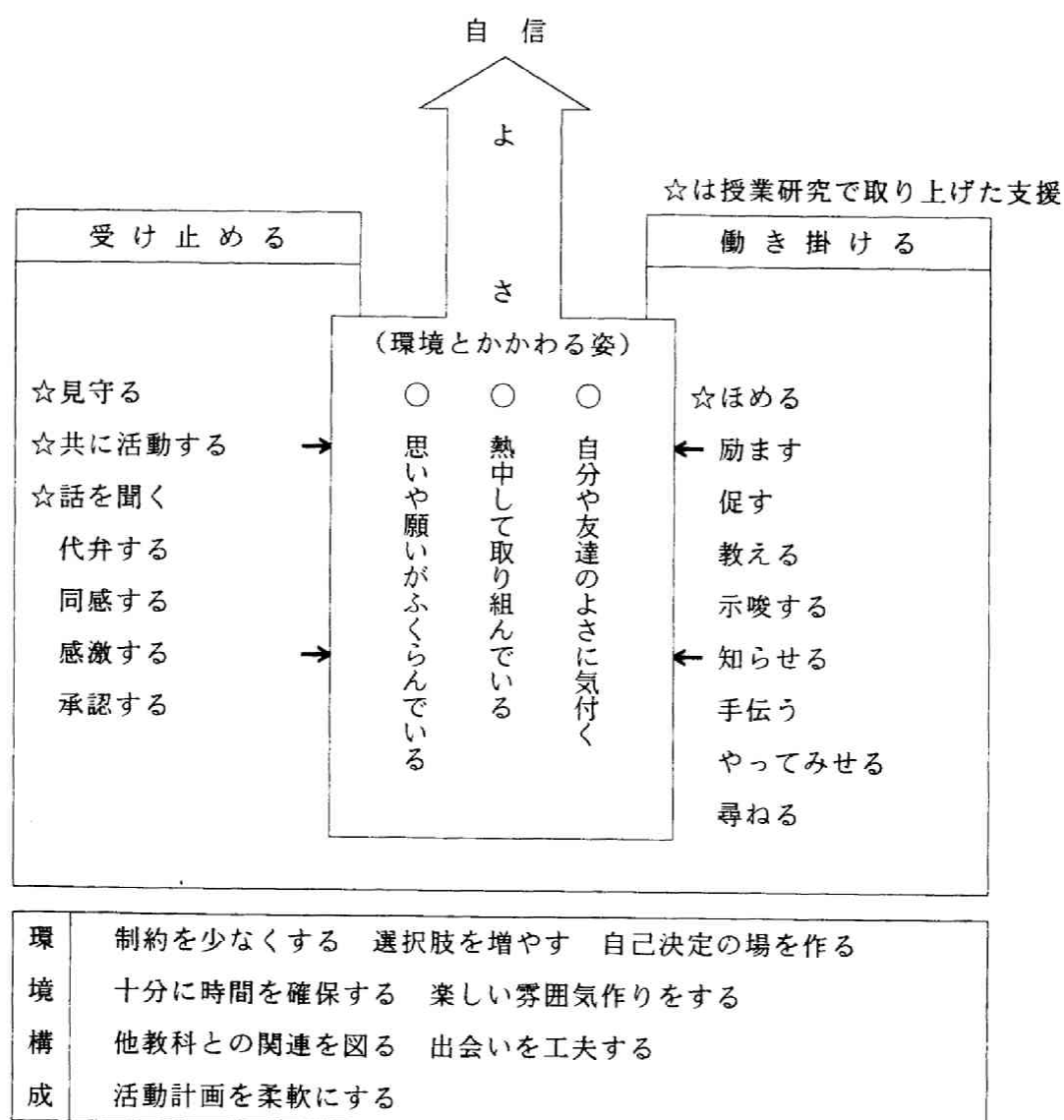
とりと考えることができ、基本的には児童の活動を受け止め、それを理解し判断して、的確に児童の学習のために返していくことであると考えることができるからである。

「受け止める」支援は、それまでの経過やその場の状況から、児童の活動を共感的に受容して、安心して活動できるようにしたり、活動への意欲を高めたりするための支援ということができる。また、「働き掛ける」支援は、児童の思いや願いを大切にしながら、その児童の活動を受け止めて、具体的な手だてを講じ、児童の活動への意欲の喚起や、活動への方向付けとなる支援ということができる。

また、これらの支援が有効に働くためには、学習環境の整備や構成に配慮することが大切である。

以上のことを、次の図のように表した。

〈受け止める・働き掛ける支援〉



まず、児童の活動や心情を、共感的に受容することが大切で、見守る、励ますなどそのための具体的な方法を教師が身に付けていることが大切である。そして、受け止めたことを内

容や方法、適時性などに配慮し、具体的な働き掛けとして、支援を実行していく必要がある。しかし、実際には、単に受け止める段階で止まっていたり、前後の活動の様子を的確にとらえることなく、その場、その時だけの働き掛けになったりすることも多い。受け止めることと働き掛けることを見直し、真に有効な支援につなげていきたいと考えた。

また、支援を「受け止める」と「働き掛ける」とにとらえなおすことで、教師が児童の内面について意識化し、よりの確な支援ができると考えた。

このような支援のもとで、児童は身近な環境とのかかわりを深め、一人一人がよさを発揮し、自信をもって行動できるようになると考えた。

(2) 授業研究で取り上げた支援とその見直し

① ほめる

「よくできたね」「がんばったね」などは、児童の活動の意義を教師が認めたときにできる言葉である。ほめられることにより、児童は自分のしたことがよかったのだという実感を持つだけでなく、自分の活動が認められたことで、次もがんばってみようという意欲を高めることになる。ほめるという支援の大切さについては、これまでも指摘されてきたが、生活科の授業の中での的確なほめ方についてさらに深めていくことが大切であると考えた。

ほめる支援を行う場合に教師は、児童の努力したこと、方法のよさ、気付きなど、何をどのようにほめるのかということを考えておく必要がある。言葉だけでなく、教師の表情や身振りでほめたり、本人と一緒にやってみてほめるなども大切なことである。また、児童の行動を連続して観察していないと具体性に乏しく、児童にとってはピントの外れた無用の言葉掛けやほめ方となったりすることもある。

以上のことから、ほめるタイミングや、本当にその児童自身が納得するほめ方か、次への行動を促すほめ方か、また、ほめると他の支援との関連などについて見直しを図っていく必要があると考えた。

② 見守る

「教師はすぐに口や手を出さずに、一步引いて見守ることが大切である」とよく言われる。それは教師が支援したつもりでも、児童が自力で解決しようとしているせっかくの機会を奪うことになる場合もあるからである。しかし、ただ見ているだけでは、児童の役に立つ支援とはいえない。見守られている児童が、見守っている教師の存在で、安心して活動できるようにすることが大切なことである。児童は、どうしてよいか分からなくなったときなど、教師に聞こえるようにつぶやくことがある。教師や周りの友達の存在を意識し、心情をアピールしているのである。そのため、学習環境の整備や安全面などに手を尽くした上で、温かく見守ることが大切である。また、教師が見守るときには、次の支援のためのタイミングを図るばかりではなく、児童の活動やその心情に寄り添って見守る必要がある。そのためには、一人一人の活動や心情を理解し、児童から見える場所で見守ったり、遠くから見守ったり、あるいは、見守る時間なども考慮して支援を工夫していくことが大切である。

以上のことから、一人一人の児童のそれまでの活動やこだわりを思い起こし、今の活動や

心情を理解しようと努めながら見守る、次への活動の発展や深まりを予測し働き掛ける支援との関連を意識しながら見守る、などについて見直しを図っていく必要があると考えた。

③ 共に活動する

教師が児童と一緒に同じものを作ったり、遊んだりするなど共に活動することは、児童のつまずきに即時に対応することができるという利点がある。また、児童の活動や心情を肌で感じ取り、その後の支援の方向を推測する上でも有効であると考えられている。

しかし、共に活動するということについて、これまで本当に児童の立場に立ってとらえてきたかということについて反省する点があった。

児童にとって、教師と一緒に活動しているということは、児童同士で活動しているときには感じることはできない、常に共感してくれる大人がそばにいるということである。大人が自分と同じことをしているという安心感は、活動を共有し熱中して取り組む雰囲気をつくり児童の活動への意欲を高める。また、教師の活動がモデルとなり、児童自身が自分を振り返りながら活動を進めていくことにもつながる。

したがって、教師は児童と共に活動することを通して、気付きの喜びをはじめ、成熟感やつまずきなど、児童の心情を共有し、安心感や自信を与えていくことを大切にする必要がある。常に共に活動することで、かえって依頼心を強くすることがないように、一人一人の児童の個性や発達など、その実態に配慮することはいうまでもない。

以上のことから、共に活動する支援では、共に活動する中で児童の心情にどのようにしたら寄り添うことができるか、いつ共に活動するかなどについて見直しを図っていく必要があると考えた。

④ 話を聞く

教師は、児童の思いや願い、気付き、つまずきを把握するために、児童の話を聞くことがある。しかし、話を聞くということを支援として考えるとき、単に聞くという受動的な意味以上のものがあるように思われる。

児童は、うれしいときや新たな発見をしたとき、だれかに聞いてもらいたいという思いを強くもち、教師に話し掛けてくることがある。また、つまずいたときにも問題解決の方法を教師に質問することがある。教師に聞いてもらいたい、心情を受け止めてもらいたい、認めてもらいたいのである。また、児童が言いに来たのを教師が聞くことと、教師の側から積極的に尋ねることとは関係が深い。

したがって、教師が話を聞くにあたっては、その児童の心情を受け止めることを大切にしながら当該の児童に教師が受け止めたことがしっかりと伝わるすることが大切である。教師が表情や言葉でそれを伝えることで、児童は、自分の活動の方向について見通しをもったり、活動の結果について自信を深めたりし、さらに意欲的に取り組むようになる。

以上のことから、話を聞く支援では、児童の話を真剣に聞くにはどうしたらよいか、聞き取ったことをどのように伝えるかなどについて見直しを図っていくこととした。

V 実践事例

第2学年

「ほめる」支援の見直しと工夫

単元名「子ども広場へようこそ」

1. 単元のねらい

- ・身近な材料を活用して、おもちゃを工夫して作り、遊ぶことができる。
- ・友達と協力したり、工夫し合ったりして、自分や友達のよさに気付く。
- ・子ども広場を開き、1年生が楽しむよう工夫をすることができる。

2. 単元について

大きなおもちゃを友達と協力して作り、楽しく遊ぶ体験をさせたいと考えた。ものを作ることは創造力をはぐくむ活動である。何を作りたいかを考え、適切な材料をそろえ、道具を使ってよりよいものを工夫して作り上げることは、満足感のみならず、その過程で、自分や友達のよさに気付く、人やものとのかかわりを深める活動となると考えた。

3. 研究主題と本単元との関連

(1) 身近な環境とのかかわり

人…クラスの友達・1年生・地域の人・家族（相談する、一緒に作る、遊ぶ、世話をする
質問をする、教えてもらう）

自然…風・水・坂・季節のもの（試してみる、利用する）

社会…作品展・地域のお店（見学する、材料をもらいに行く）

(2) 一人一人のよさ

本単元で、児童は作品展を見学しながら、自分も作ってみたいとか、遊んでみたいという思いをもち、もっと詳しく見よう、知ろうと積極的にかかわろうとする。また、作ったものを試し遊ぶときには、自然の力を利用して、もっとよいものにしようと工夫を重ね、それぞれの場面で身近な環境とのかかわりを深めていくことが予想される。

その中でも人とのかかわりにみられるよさに着目してみた。材料集めでは、段ボールを集めるために地域の人やお店にお願いしたり、もらってきたりするなど、目的に向って身の回りの大人とのかかわりが生じ、一緒に子ども広場を開く1年生には、やさしく世話をしたり、一緒に遊んだりすることで一層仲良くなり、さらに遊ぼうという思いをもつであろう。また、単元を通したクラスの友達とのかかわりでは、おもちゃ作りの発想、材料集めの工夫、製作中の工夫、あるいは問題解決の方法、招待する1年生への配慮など、一人一人の児童の多様なよさが発揮されるであろう。それらのよさにお互いが触れ合うことで友達に対する見方を変えたり、自分の中によさを取り込み意欲的に活動することが期待される。

(3) 支援の工夫

本単元では、話し合いながら作業を進めることが大切である。互いのよさに触れ合えれば、一層夢中になり、友達と一緒に作って作る楽しさを味わうことができると考えた。そこで、協力している姿や努力していることなど、ほめる視点を明確にして活動を見取るように工夫した。

4. 活動計画（14時間）

- ・ぼくたちもおもちゃを作ろう（1時間）
- ・材料を集めよう
- ・作り方を考えよう
- ・作ろう
- ・遊ぼう
- ・他の人にも遊んでもらおう（5時間）

（8時間）

5. 本時の活動

本時は単元14時間中の4時間目にあたる。自分たちの製作に必要な材料を集め、それらを使ってグループに分かれて実際に作る活動である。

6. 児童の変容と教師の支援

「自分勝手」と周囲の児童から思われがちなB児が、ほめられることで変容した例

(1) B児のプロフィールと教師の願い

B児は自分の考えをもち、はっきりと主張することができる。しかし、時としてそれが災いし、自分の考えを通そうとするあまり、友達を消極的にしてしまったり、反発をまねいてトラブルを起こしてしまったりすることが度々あった。教師は、B児が話し合いながら友達の意見を取り入れ、仲良く助け合って、共に喜びを分かち合えるようになってほしいと願っている。そのためには、友達とかかわっている場面で、これまでのように自分の考えを強く主張していてもすぐには注意をせず、むしろ友達に配慮しようとしているわずかな姿をとらえ、即座に具体的な言葉でほめるという支援を行うことが大切だと考えて授業に臨んだ。

(2) 本時に至るまでのB児の活動の様子

おもちゃ作りのきっかけとなった教室に置いてあった大きな段ボールに強い興味を示して、自ら中に入ったり積み上げたりしながら遊んだ。段ボールで何か作ろうということになったとき、自分からアイデアを次々と発表し、発想の豊かさや、思いをすぐ言葉にすることができるよさを発揮した。それを全体場でほめた。B児の発言をきっかけとして、本単元「子ども広場へようこそ」がスタートした。そのため、本人も一層やる気をもったようであった。



製作グループを作るとき、大好きな怪獣を作りたいと提案し、常に行動を共にしているC児とD児を誘った。C児もD児も自分が作りたいものをさほど強くイメージできなかったようで、B児の誘いにのって活動を始めることができた。

(3) 本時におけるB児への支援とB児の変容

- ① ほめることで気持ちを充足させ、友達に正しく伝えようとする余裕をもたせる。

自分が作ろうとしている大好きな怪獣のイメージを、友達に十分に伝えないまま作業が

進んでいた。そこで、教師はB児のもっている怪獣のイメージを言葉で表現させた。B児は、張り切って話し始めた。B児が一応満足したところを見計らって、「怪獣のこと、詳しいんだねえ」と感心しながらほめ、「でも、みんなはそんなに詳しくないから、ちゃんと説明してあげた方がいいね」と自分の考えていることを、友達に言葉で正しく伝えるように促した。B児は、自分の得意としていることをほめられたため、とても満足したようで、自分が作ろうとイメージしている怪獣の様子を友達に丁寧に話し始め、自分自身の中にある怪獣作りの思いをさらにふくらませた。

② 周囲の友達のよさに気づき、友達に対する見方や接し方を変える。

作業が進むにつれて、自分のイメージが強いため、友達に対して「～して」と、指示することが多くなってきた。そこで教師はC児とD児の地道な作業への努力をほめ、その価値を大いに認めることで、友達のよさや作業を進める上で分担することの大切さに目を向けさせた。すると、B児の口から「Cちゃんは上手だから」とか「ありがとう」という言葉が聞かれ、それまで語気の強かった指示の言葉が、優しく語りかけるような口調へと変わり、さらに熱中して取り組むようになった。

また、C児やD児の地道で労力を要する、段ボールを切るという作業を自分から手伝うなど友達への接し方にも変化が見られた。

③ 振り返りを促すために、進歩した姿をほめ自信がもてるようにする。

友達の作業を手助けするなど、協力している姿を「三人でがんばっているね」と、感心しながらほめた。すると、B児は「チームワークが必要なんだ」「最初はけんかばかりしていて、友情とか言っていたけど・・・」「最初はおんたが悪い、おんたが悪いって言っていたけど・・・」とつぶやき始め、さかんにそれまでの自分の姿を振り返っていた。



終了時に、みんなで集まって感想を言う場面では、「今日は、三人のチームワークでよくできました」と生き生きした表情で発表し、自分に自信がもてたようである。

教室へ戻ってからも、とてもうれしそうな表情で、友達にも優しく接していた。

7. 考察

(1) 「ほめる」支援

ほめられた児童は、うれしいという気持ちをもつと同時に、気持ちが安定する。そのことは、自分の行動を省みたり、友達のよさに目を向けることができたりといった、余裕を生み出す。そしてさらには、人の意見を素直に受け入れることができるようになる。その心の余裕が、身近な環境の一つである「友達とのかかわり」を「深める」ことにつながっていく場合があることが分かった。

(2) ほめる支援を支える「受け止める」支援

ほめるためには、ほめることだけを考えていればよいということではない。ほめるためには、そのタイミングを見計らい、具体的にほめることが大切である。したがって上記の事例のように、ほめる支援を有効に行うためには、一人一人の活動をよく見守っていることも大切な支援である。そのことにより、児童は、人の考えを素直に受け入れられるなど、心の余裕をもつことができるようになる。

また、ほめた後でさらに活動への方向付けをするなど次の支援を行うことにより、児童は身近な環境とのかかわりを深めよさを生かすことができると考える。

(3) 「ほめる」支援を効果的に行うために

上記の事例にはないが、ほめるという支援について、言葉だけに頼るのではなく教師が身振りや表情などを工夫し、教師の感動や気持ちがより児童の心に響くようにしていくことも大切であると思われる。



1 単元のねらい

- ・自分たちで計画を立て、安全に気を付けて、正しく公共交通機関としての電車を利用できる。
- ・友達と協力し合って行動し、自分や友達のよさに気付く。
- ・自分たちで電車を利用したときの様子や感じたことを工夫して表現することができる。

2 単元について

児童だけのグループで乗り物を利用するという事は、大きな緊張感を伴う活動である。また、校外に出ると、途中で何らかの問題が起こり、自分たちで解決しなければならなくなることも考えられる。それだけに、やり遂げた喜びや自信も大きく、自分や友達のよさに気付き、かかわりを深め合える活動となると考えた。また、安全で正確な運行のために働く人々の様子や施設・設備の工夫などについては、利用者としての自分とのかかわりを通して、体験に基づいて実感として分かっていくことを大切にしたいと考えた。

3 研究主題と本単元との関連

(1) 身近な環境とのかかわり

人……駅員・乗務員（話を聞く、質問する、困って相談する、注意を受ける、働く様子を見る）

他の乗客・公園や道で出会う人・用務主事・参加した保護者（話し掛けられて答える、困って尋ねる、注意を受ける、出会いにより気付く）

グループの友達（一緒に計画を立てる、出かける、しおりを作る、発表する）

自然…秋の公園の木・草・実・葉・虫など（見つける、拾う、集める、飼う、作る）

社会…駅や電車の設備や施設（利用する、よく見る）

公園（遊ぶ、探す）

(2) 一人一人のよさ

目的地に行くために、グループで活動することとなる。実際に地下鉄に乗って目的地に行くためには、料金や切符の買い方はもちろん車内のアナウンスや駅の案内板など、それまでは、さして気に留めていなかったものが、利用者である自分たちに必要な情報を提供してくれていることに気付くことになる。それらの情報を選択し判断しながら交通機関の正しい利用の仕方を身に付け、大きな自信につながるだろうと考えた。

また、思わぬハプニングから、駅員さんに相談に行くなど、積極的に問題解決のために行動をとることがあることも予想される。相談に行き、話をすることを通して、駅で働く人とのかかわりを深めることにもなる。

さらに、光が丘公園に行きたいという思いから、駅の様子を積極的に見に行ったり、地下鉄に乗るために必要な金額や、持ち物、また、楽しく行くための約束や、困ったときにとる行動など、自分たちで工夫しながらしおりに書き表したりすることで、期待をふくらませることとなる。このように、準備の段階から、徐々に、駅・電車の設備・施設や駅で働く人と

かかわりを深めることができると考える。

(3) 支援の工夫

本単元では、児童が実際に自分たちだけの力で電車に乗り目的地に着くことが、活動の大きな柱である。自分で考え、判断し適切な行動ができるようになることが大切だと考えた。そこで、見守る位置や教師の表情など、見守る支援の工夫を探ることとした。

4 活動計画（9時間）

(1) 地下鉄に乗って行く計画をたてよう（4時間）

- ・光が丘公園へ行こうよ
- ・練馬駅に調べに行こう
- ・グループで相談しよう
- ・光が丘公園へ行く準備をしよう

(2) 光が丘公園へ出かけよう（3時間）

(3) こんなことがあったよ（2時間）

5 本時の活動

本時は単元9時間中の5・6・7時間目にあたる。4人前後のグループで、時差をつけて出発し、自分たちで切符を買って地下鉄に乗り、学校から光が丘公園までを往復する活動である。

教師は、出発・到着地点と駅での児童の安全を確認しながら適時支援を行った。

なお、公園では、ドングリ拾いをするなど、自然とかかわる活動をした。

6 児童の変容と教師の支援

十分に自分を発揮できずにいたE児が、見守られることで生き生きと活動した事例

(1) E児のプロフィール

積極性があり、常に自分の考えを明確に主張することができる。しかし、繊細な一面をもち合わせ、自分の思いが遂げられないと、意欲を失い、消極的になってしまうことがある。今までは、教師が「〇〇したら…」と促すことで、消極的になったE児の意欲を喚起してきた。しかし、そのことがかえって、E児が十分な成就感を味ったり、それに伴う自信をもったりすることを妨げてきたのではないかとも思われる。

(2) 本時に至るまでのE児の活動の様子と教師の願い

E児は、楽しみにしていた駅に調べに行く活動の日に欠席してしまった。そのため、グループの友達が、調べに行ったことを楽しそうに思い出しながら、しおりを作っているとき、E児は意欲的に活動することができなかった。また、消極的なE児の態度は、グループの友達の反発をかうこととなり、ますます意欲を失うこととなってしまった。教師が、E児の気持ちを察して、話し掛けるものの、何事にも積極的にかかわろうとする彼本来のよさがまだ発揮されてはいなかった。

教師は、今までも同じような場面で、常に直接かかわることでE児の意欲を喚起してきた。しかし、本時では、E児の様子を温かく見守る中で、彼本来の積極性を発揮し、友達と共に活動する喜びを味わってほしいと願っている。



(3) 本時におけるE児への支援とE児の変容

① 見守ることで、信頼されていることを感じ取り意欲を引き出す。

E児と同じグループのF児が、駅で切符の券売機に100円を入れ、払い戻しのボタンを押したら、釣り銭口に110円があった。戸惑っていたF児が、教師のところに来た。教師は近くからそれを見守っていた。同時に、E児は、事情を素早く把握し、同じグループの他の友達二人に説明し始めた。教師はF児にE児の話を聞いたらと促し、E児にはほえんだ。E児が中心になりグループで、余分な10円をどうするかについて真剣な話し合いが行われた。それまで消極的に行動していたE児が、教師の温かい見守りによって意欲的になったのである。

② 見守ることで、自分の力でやり遂げた喜びを味わい自信を深める。

話し合いで、駅の人に届けに行くことに決まり、説明役のE児を先頭に緊張した表情で駅員に事情を伝えた。E児は10円を手渡し、教師に誇らしげに手を振り改札口を通過して行った。教師が見守る中で、駅員と進んでかわり、問題を解決できた喜びを味わうとともに、自分の思ったことをはっきり話すことができるというE児のよさがグループの友達に認められ、E児の自信を深めることとなった。

③ 見守ることで、次のほめる支援の効果を高める。

学校に戻って来た時、「あの10円、自分たちで届けることができ、感心したわ」と声を掛けると、E児は実にうれしそうに、「ぼくが話したんだ」と答えた。そして、次時には、これまで意欲的に書こうとしなかったしおりにも、しっかりした字で楽しかったことなどを書き入れて、いち早く見せにきた。

温かく見守ることによって、E児は本来の積極性を取り戻したように思われる。

7 考察

(1) 「見守る」支援

教師が見守っていることで、児童は、自分がやろうとしていることへの教師の期待感や信頼感を感じ、意欲的に活動するようになることが分かった。また、単に見守るだけでなく、前時までの全体や個に対する支援があって、児童が主体的に友達や人とかわっていくことができると考えられる。

(2) 見守る支援と「働き掛ける」支援の関連

児童の活動の様子を見守り一人一人のよさをほめたとき、児童は自分のことをよく分かってほめてくれていると感じる。それが次の活動への意欲を高める。また、児童がどうしたらよいか分からずにいたり、活動のポイントがねらいからずれていたりしたとき、見守るから働き掛ける支援につなげることが必要となる。見守る支援を考えると、働き掛ける支援と切り離しては、考えられないことが分かった。

(3) 見守る支援を有効に行うために

見守る支援を行うためには、事前の準備や支援をしっかりとしておくことが前提であるが、それまでの活動の様子から、なぜ今、この児童を見守るのかという意図を明確にする必要がある。見守るときの教師の位置、教師の表情、目線などにも配慮することが大切である。

1 単元のねらい

- ・身近な生き物と触れ合ったり、育てたりしながら親しみをもって世話をすることができる。
- ・生き物の変化や成長の様子に気付くとともに、生き物は自分たちと同じように成長していることに気付く。
- ・育てている生き物の変化や成長の様子を絵や文で表現することができる。
- ・協力して飼育しながら自分や友達のよさに気付く。

2 単元について

「先生かわいいでしょう」と開いてみせてくれた手の中には赤ちゃんを抱いたダンゴムシがいた。児童は生き物に興味を持っている。しかし、自然の減少や生活様式の変化に伴い、生き物とかかわる機会が減ってきている。そこで、生き物と直接触れ合う活動や育てる活動を通して生き物に親しみをもち、それらの変化や成長の様子に気付き、小さな命に目を向けられるようになってほしいと考えた。

3 研究主題と本単元との関連

(1) 身近な環境とのかかわり

人………クラスの友達・生き物に詳しい上級生や教師・ふれ合い動物園の先生（一緒に育てる、相談する、尋ねる、教えてもらう）

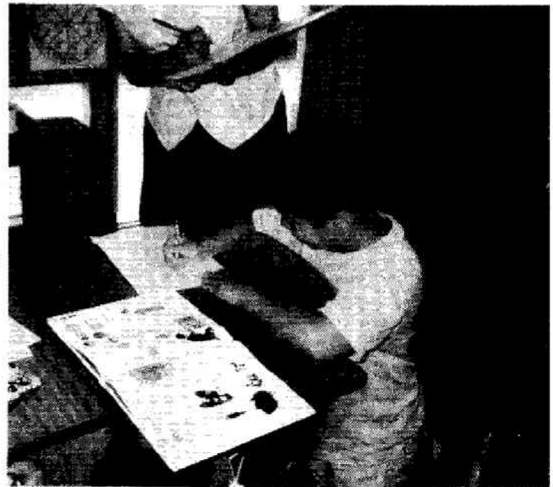
自然………生き物（探す、育てる）畑・校庭の草や木（えさをとる）

社会………ふれ合い動物園（見学する）

(2) 一人一人のよさ

学校のプールでヤゴを捕まえたり、畑で生き物を探す体験をさせたい。それらの活動の中から「チョウの幼虫を育ててみたい」「ヤゴからトンボになってほしい」といった一人一人の願いが生まれるであろう。これらの願いを大切に受け止め生き物とのかかわりを深めていくように支援する。

飼育活動は長期にわたるため様々な困難や問題、発見に出会うであろう。児童は、本で調べてみたり、生き物に声を掛けてみたり、飼育委員会の児童や生き物に詳しい教師に尋ねてみたり、地域にある「ふれ合い動物園」に相談に行ったりしながら、自分で考え、判断し、生き物と自分とのかかわりを深めていく。そのことを通して、一人一人のよさが発揮され则认为る。



(3) 支援の工夫

生き物に対する願いは一人一人皆違う。教師が、一人一人の児童の思いや願いを受け止め共に悩んだり、問題解決の方法を考えたり、喜んだりすることで、児童が安心し、意欲をもって主体的に活動するようになると考えた。そこで、「共に活動する」という支援についてその時機やどこまで手伝うなど教師のかかわり方の深さ、児童の心情の読み取りなどについて見直し工夫を探ることとした。

4 活動計画（10時間）

- ① 生き物と触れ合おう (2時間)
- ② 生き物の世話をしよう
生き物ランドを開こう (6時間)
- ③ 生き物とさようなら (2時間)

5 本時の活動

本時は10時間中の4時間目にあたる。児童は常時活動として登校後、休み時間、給食準備の時間などを使い生き物の世話をしていた。しかし、短時間のため、児童の願いである「自分の生き物をよく見たい」「一緒に遊びたい」など、生き物と十分にかかわるまでにはいかなかった。

そこで、本時は「生き物ともっと一緒にいたい。遊びたい」という願いをかなえるために設定した。自分から生き物にえさをあげたり、遊んだり、手にのせて様子を見たりしながら生き物と十分に触れ合うようにした。

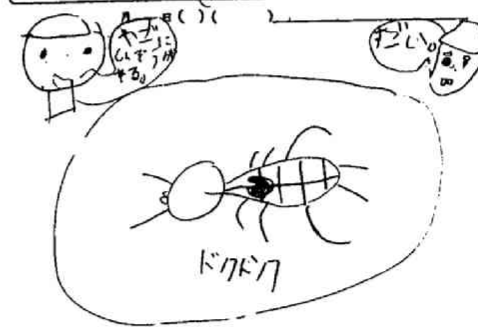


かたつむりのあちゃんを見つけたよ！
かたつむりのあちゃん
たんぽぽ

ほんとのいきもの
かくだい →

きょう、たまごからカタツムリの赤ちゃん
がうまれました。みんなに見せたりおど
ろいてよこびました。ハッピーバースデ
のうたをうたってクラスの中まにしました。
赤ちゃんのころからひかてダイヤモ
ンドのようでした。
やごがトンボになつた日とか
たつむりがうまれた日とか
なじめてした。かたつむりが
たまごをうんでまたかたつむ
りの世話をしたいです。

やごのしんぞうを見つけたよ！



きょう、学校で、えをかりてたら
やごにしんぞうがあったよ。せ
ながらへんにあったよ。ドキドキ
なつたよ。よく見たらやごの
せなかにはねみたいなのが
あったよ。はやくトンボになつてほしいな。

6 児童の変容と教師の支援

共に活動することで、継続して世話をするようになったG児の事例

(1) G児のプロフィールと教師の願い

いろいろなことに興味をもち取り組もうとするG児である。生き物に対しても興味がありいろいろなものを飼ってみたいと思っている。しかし、まだ表面的なかわいさや珍しさから活動することが多く、活動が長続きしない。教師は、G児に、生き物の世話をしながらえさをあげる楽しさや育つ喜びを十分に味わってほしいと願っている。食べ残しの処理などが苦手なG児なので、教師が共に活動することで、活動への意欲をもち、生き物に親しみをもち小さな命でも大切にしようとする心を育てたいと願っている。

(2) 本時に至るまでのG児の活動の様子

生き物探しでは、プールや畑に行き、ヤゴやチョウの幼虫などを意欲的に探していた。朝の生き物タイムでは、虫めがねで観察したりえさをあげたりしている。カタツムリの卵を見つけてからは意欲が増し、カタツムリの赤ちゃんを見たいと願い、毎日頑張って世話をしている。

(3) 本時におけるG児への支援とG児の変容

① 共に活動することで楽しい雰囲気をつくり、やる気を引き出す。

「カタツムリのことをもっと調べて博士になりたい。赤ちゃんが見たい」というG児の願いをかなえてあげたいと考え、えさの交換などを一緒に行った。「きれいになったね。キュウリやニンジン食べかけをとるのは大変だったけれど、カタツムリはきれいになったのでうれしいって喜んでいいるだろうね」と声を掛けた。苦手なものを最後まで頑張り処理したことを認められたG児は、「いやだなと思いながら掃除したけど、ぼくのカタツムリだものな。カタツムリが角を出して喜んでいいる。よかった」と満足した表情になった。そして、「今度は虫めがねでよく見て、博士をめざすぞ」と願いをさらにふくらませ、かわりを深めていった。

② 共に活動することで大きな喜びを味わう。

「カタツムリの赤ちゃんがうまれた」と言うG児の発見を共に喜ぶことで、活動の充実感を味わうようにした。この事を皆に知らせた。「やったね。よかったね」と皆と一緒に喜び、カタツムリの赤ちゃんを囲んでハッピーバースディの歌の大合唱となった。そして、このことをクラスの「思い出カレンダー」に記念日として記入した。教師や友達と喜びを共有し、頑張ったことが認められたことによってG児は自信をもった。生き物の扱いが優しく、丁寧になり、「カタツムリを飼ってよかったな」とつぶやいた。



その後、小さなカタツムリの様子を虫めがねで見たり、本と比べながら調べたりするなどさらに熱中して取り組むことができるようになった。

③ 共に活動することで自分や友達のよさに気付く。



カタツムリが鉛筆の先から落ちないことを不思議に思ったG児。机の縁をはわせたり定規の上を歩かせてみたりした。歩いた後が線のように残ることに気付き不思議に感じたようだ。最後に自分の手にのせ「カタツムリってねばねばしているんだ。接着剤みたいだから落ちないんだ」と叫んだ。その発見を友達に知らせた。友達も手にのせ「本当だ。ねばねばしてるんだね」とG児の発見を喜んだ。教師は、「毎日世話をしてきたからカタツムリの秘密が発見できたんだね」とほめた。G児は自分の発見を認められたことで、自分が生き物を大切に育てていることに気が付いてさらに意欲的にかかわるようになっていった。

7 考察

(1) 「共に活動する」支援

話を聞いたり、考えたり、共に活動することにより、一人一人の思いや願いが共有でき、児童は安心して意欲的に活動した。生き物と上手にかかわれない児童に対しては、教師が共に活動することで安心感が生まれ、少しずつ触れるようになった。また、進んでかかわる児童には、活動しながら「世話が上手だね」などと声を掛け、皆に広めた。認められたことにより「頑張って育ててよかったな。これからも世話を続けよう」と新たな意欲をもったり、「分からないときは、生き物博士の〇〇君に聞こう」などと自分や友達のよさにも気付くことができるようになっていった。このように、児童と共に活動することは児童のつまずきや願いに即時に対応することができ、次の支援につながりやすいことが分かった。

(2) 共に活動する支援を意図的・計画的に行うために

この単元で、この時間に、今このときにどの児童と「共に活動する」ことが最も望ましいことなのか、そして、共に活動することで、その児童のどのようなよさを伸ばすのか、計画的な支援が行えるよう、一人一人の見取りを充実していくことが大切である。

1 単元のねらい

- ・自分で育ててきたアサガオの一生の姿に気付き、最後まで大切に世話することができる。
- ・枯れた後も愛着の心をもって、つるや鉢などを生かした活動に取り組むことができる。
- ・つるや自然のものを使い、思い出に残るものを工夫しながら楽しく作ることができる。

2 単元について

5月の種まきから始まって、6カ月以上にわたり、児童は自分のアサガオを育ててきた。日常の継続的な世話や観察のほかに、押し花作り、汁遊び、種とりの活動等を経験し児童は、自分のアサガオに対する愛着を深めてきた。一生を終えようとするアサガオを最後まで世話し、つるや鉢等を生かした活動に取り組むことで、生命を大切にする心、植物に親しむ心をはぐくんでほしいと考えた。

また、話し合い活動や造形的な活動は、創意工夫、アイデアを発揮することで、自分や友達のよさに気付くことができる場になると考えた。

3 研究主題と本単元との関連

(1) 身近な環境とのかかわり

人……クラスの友達（共に考える、一緒に調べる、作る、手伝う、教え合う）

家族、他の教師（相談する、質問する、話し掛けられて答える）

自然……アサガオ（世話をする、活用する、思いを表現する）

校庭・公園の枝や葉、木の実（材料として活用する）

社会……図書室、公園（調べる、自然の材料を探す）

(2) 一人一人のよさ

本単元の活動は、児童が1学期から継続して行ってきたアサガオの栽培・観察、その他の活動の、いわば、最終段階にあたる活動である。これまで、学校や家庭で自分の仕事としてずっと育ててきた経験を踏まえて、児童は一人一鉢のアサガオを、自分とのかかわりにおいて非常に身近なものとしてとらえてきた。一人一人がそれぞれの思い入れを込めて「自分のアサガオ」に対して深い愛着を感じてきている。

そうした特別な親しみの心を胸に抱きながら、児童は一生を終えようとしているアサガオを目の前にして、今後の世話の仕方や枯れた後のつるや鉢の生かし方を一生懸命考えたり、アサガオへの気持ちを大切に、思い出を残す作品作りに進んで取り組んだりするなど、アサガオとのかかわりをさらに深めていくことが予想される。

アサガオへの愛着心から、児童は先行経験やもてる知識を踏まえて様々な発言をし、本や図鑑で調べようという意欲をもつであろうし、造形的な活動では、自分なりの創意工夫を思いっきり発揮しようという気持ちを抱くであろう。それらは、アサガオとのかかわりを深めることによって生まれる児童のよさといえる。

また、クラスの友達とのかかわりという点では、話し合いや報告をし合う活動で友達と共に考え、共に計画を立てる活動に参加し、作品作りの活動では、互いに教え合ったり、

手伝ったりという経験を通し、仲間意識を一層はぐくむことが期待できる。

家族や他の教師に対しては、質問をしたり、相談をもちかけたり、アサガオを大切にしようとする心から自主的なかわりをもつことが考えられる。これらも人とのかわりを深めることで児童が発揮するよさにとらえることができる。

(3) 支援の工夫

長い間育ててきた「自分のアサガオ」への愛着心から生まれる児童の思いや願いを、教師が共感的に受け止め、認めることによって、児童はより自主的・意欲的に活動に取り組み熱中できると考える。

そこで、本単元では、思いや願いを受容するために、「話を聞く」という支援を取り上げ、その見直しと改善を図ることとした。特にその工夫としては、児童の思いや願いを聞こうとするときに、進んで児童と向き合い表情や態度などで教師が真剣に受け止めようとする気持ちが児童に伝わるような配慮をしたいと考えた。

4 活動計画（6時間）

- | | |
|-----------------------|-------|
| (1) アサガオを最後まで見守ってあげよう | (1時間) |
| (2) アサガオの思い出になるものを作ろう | (3時間) |
| (3) アサガオとお別れをしよう | (2時間) |

5 本時の活動

本時は、単元6時間中の3時間目にあたる。アサガオのつるを主な材料とし、これまで育ててきた自分のアサガオの思い出になるようなものを自由に作る活動である。

6 児童の変容と教師の支援

集団の中の一人として自分を表現することの苦手なH児が、教師に話を聞いてもらうことで変容した事例。

(1) H児のプロフィールと教師の願い

教師とのかかわりでは、普段から人なつっこく、明るく元気に振る舞う。しかし、集団の中に入ると、発言することも少なく、内気な面が目立ってしまうH児である。

教師との個人的なつながりを求めようとすることが多いので、話を聞くことを中心に、できるだけその願いに寄り添いながら、アサガオへの自分の思いを伸び伸び表現してほしいと願っている。

(2) 本時に至るまでのH児の活動の様子

H児は、生き物に興味をもっている。アサガオについても、進んで世話をし、観察もしている。気付いたことは、よく教師のところへ報告に来ていた。アサガオのつると一緒に使う自然の材料集めを呼び掛けると、2日後にはさっそく袋一杯にドングリをもってきた。近くの公園に出掛けたときも、教師のそばで、材料探しに意欲的に取り組んでいた。



(3) 本時におけるH児への支援とH児の変容

① 話を聞くことで活動が持続する。

支柱にからまっていたつるを、やっとの思いではずしたH児が、「ぬけたよ」と合図を送ってきた。大きくうなずいてみせると、H児は満足げに、今度はリース作りに取り組んだ。しかし、つるのつなぎ方につまずき、「先生、助けて」と援助を求めて来たので、それを受け止め、モールの使い方を知らせた。H児は再び輪にする作業に夢中になった。冠を作ろうとして、つるがうまく束ねられないと「先生、助けて」とまた来た。共に活動しながら手伝うと、H児は「もう一つつきたい」と意欲を見せ、うれしそうに活動を続け、さらに一個の冠を作った。教師が受容する態度で話を聞くことによって、H児は、心に安心と満足を感じ、作りたいものを熱中して作り続けることができた。

② 話を聞くことで伸び伸びと活動し、自分らしさを発揮する。

作業のつまずきへの援助を求め、教師にそばで見守ってもらいたいという願望を満たそうとしていたH児だったが、それが受け入れられると、後半は、だいぶ落ち着いて、楽しそうに活動に取り組む姿が見られるようになった。やはり進んで教師に話しかけてくるのだが、「先生見て」「あそこやるだけ」のように、作業の様子や成果を得意気に知らせる口ぶりに変わっていった。教師がその都度、努力や出来栄をほめながらH児の話を聞くことによって、H児は、思いや願いをふくらませ、自分なりのアイデアを生かして、伸び伸びといくつもの作品を作っていた。

③ 話を聞くことで心にゆとりをもたせ、友達とのかかわりを深める。

リースを作っていたH児のそばでその様子を見守っていると、H児が目の前ではり絵に取り組んでいた友達の作品を見ながら、「Gちゃん、おばけうまいね」と友達の作品をほめる言葉をつぶやいた。繰り返し話を聞き、教師が児童の心情を受け止めようとする姿勢を示すことで、それまで自分のことで精一杯だったH児の心にゆとりが生まれ、友達のよさに気付くことができたのである。友達とのかかわりを自然に深めた姿である。

7 考察

(1) 「話を聞く」支援

児童を受容する姿勢で話を聞くことにより、児童は自分が受け入れてもらえたと感じ、気持ちの安定が図られるということが分かった。それは、その後の活動意欲と心のゆとりにもつながっていた。

また、教師が真剣に話を聞くことによって、児童は話している自分を意識することができる。つまり、自分が何をどうしたいのかという自分に対する意識を高めていくことができるのである。それが自分らしさの発揮というよさを生むと考えられる。

(2) 話を聞く支援を効果的に行うために

話を聞くときは、身振り、手振りを交え、表情豊かに児童の心情を受け止めることが大切である。そのためには、その場に至るまでの児童の活動やその背景を教師がしっかり見取ることが大切である。そのことを踏まえ、「先生、先生、・・・」と話しかけてくる児童を受容し、必要に応じて、今度は、次への意欲を引き出していくため、教師の方から「尋ねる」支援を行っていくことも重要である。

VI 研究の成果と今後の課題

1. 研究を通して明らかになったこと

(1) 授業研究を通して明らかになったこと

授業研究では、特に「ほめる」「見守る」「共に活動する」「聞く」の支援を取り上げて、その見直しと工夫を探った。その結果、これらの支援の工夫について次のようにまとめることができる。

- ・ほめる支援では、児童が友達や教材とかかわり、協力している姿や努力していることなど、ほめる視点を明確にし具体的にほめることで、よさを生かすことができる。
- ・見守る支援では、児童が安心して活動できるよう手だてをしっかりとった上で、教師の立つ位置や表情などを意識して見守ることで、よさを生かすことができる。また、児童の活動から心情を読み取り、次の支援につなげていくことで、よさを生かすことができる。
- ・共に活動する支援では、一人一人の児童の活動への意欲や状況に即して、いつ、どのくらいの深さでかかわったらよいのか判断し、共に活動することで、よさを生かすことができる。
- ・話を聞く支援では、予想される活動への困難点や不安などについて、あらかじめ教師が予測し、一人一人の児童の心情を受け止め真剣に聞くよう、教師の聞く態度や場所に十分配慮することで、よさを生かすことができる。

これらに共通していることは、児童に安心感を与え、意欲を高め、活動への自信となるよう教師が共感的に支援を行うことが、児童のよさを引き出すということである。また、これらの支援が単独にあるのではなく、他の支援と連続して行ったり関連を深めたりすることで、児童のよさを一層生かすことにつながる。

(2) 研究全体を通して分かったこと。

- ・支援を行うとき、あくまでも児童のよさを生かすという発想にたって、一人一人の児童の活動をその心情や背景について見取り、支援していくことが大切である。
- ・環境とのかかわりを深め、児童が夢中になって取り組むように支援を行うことが、一人一人の活動への自己意識を高め、自分のよさを発揮して活動していくことと深く関係している。
- ・「受け止める」「働き掛ける」と支援を大きく分けることで、教師が児童のよさを引き出すことを意識して支援を行うことができるようになった。受け止める支援では、児童の活動の様子を印象だけで判断するのではなく、それまでの児童のこだわりや気付きなど、その内面や背景にまで心を寄せて読み取ることが大切である。働き掛ける支援では、児童の活動の背景を見取り、具体的な手だてを講じることで、児童は自らの活動に自信をもちさらに積極的によさを発揮して活動するようになることが分かった。また、受け止める支援と働き掛ける支援は、互いに密接に関連していることが分かった。

2. 今後の課題

- ・受け止めると働き掛ける支援の具体的な関連について、さらに追究していく。
- ・一人一人のよさを生かすという視点で、ほめる、見守る、共に活動する、話を聞く、などの支援の見直しや改善点を探ってきたが、他の支援についても授業実践を通して工夫や改善点を探る。